

麻 黃 湯

(傷寒論)

組成 麻黄 4.0 ~ 5.0、杏仁 4.0 ~ 5.0、桂枝 3.0 ~ 4.0、甘草 1.5 ~ 2.0

主治 風寒表証

効能 発汗解表、宣肺平喘

プロフィール

麻黄湯は『傷寒論』太陽病中篇に初出し、傷寒(風寒邪の侵襲によって発症する急性熱病)の太陽病期に用いる代表的処方である。インフルエンザのような急性熱性疾患の初期に適切に使用すれば速効を示す処方であり、古方の大家、尾台榕堂 13 歳のときの漢方医デビューが本方による傷寒の治療であったことは良く知られている。現在は、傷寒に類する疾患以外にもいくつかの病態に用いられている。

方解

本方は、寒邪偏盛の風寒邪が肌表を侵したものに対し、腠理を開いて発汗させ、邪を汗とともに体外に追い出す働きがある。急性熱性疾患で、悪寒、発熱(最初はない場合もある)、脈浮、頭項強痛、無汗、関節痛、喘(ハアハアとあえぐ状態)がみられる状態を治療する。

主役は麻黄で、発汗解表、宣肺平喘の作用を持ち、桂枝の辛温解表作用を得て邪気を汗とともに体外に排除する。杏仁は止咳平喘作用があり、肺氣を下降させ、麻黄の宣肺作用と共同して肺氣の流通をスムーズに行わせる。甘草は諸薬を調和し、麻黄・桂枝の作用をコントロールし、発汗過多による正気の消耗を防ぐ。

四診上の特徴

太陽病に対して用いる場合、つまり急性熱性疾患の初期に用いる場合、悪寒、頭痛、関節痛、腰痛などが見られ、脈は浮緊で、無汗である。無汗を確認するには、患者の背中に手を入れてみて、皮膚の状態を確かめると良い。投与前よりすでに発汗が見られる場合は適応とならない。

雑病に用いる場合には、急性期の使用目標はあまり見られないことが多い。

使用上の注意

麻黄湯は、麻黄を主薬とする処方であり、麻黄の主成分はエフェドリンである。それゆえ、他の麻黄含有製剤やカ

テコールアミン製剤との併用には注意を要する。エフェドリン由来の副作用として、冠動脈疾患や不整脈、発汗過多や尿閉が見られることがある。そのほかに、胃のもたれ感、心窓部痛などの消化器症状が現れることがある。

また、エフェドリンの吸収は、消化管内の pH が上昇すると亢進することが確かめられており、食後に内服した方が吸収は高く、交感神経刺激による副作用も出やすくなる可能性がある。同じ理由で制酸剤との同時服用は注意を要する¹⁾。

臨床応用

■ 感冒、インフルエンザ

感冒、インフルエンザなどの急性発熱性疾患の初期に用いる。上述のように、悪寒、発熱、頭痛、関節痛、腰痛、脈は浮緊で、無汗であるのが使用の条件である。このときの麻黄湯の使い方としては、1 回内服量を多めにするか内服回数を多くして、少し汗ばむまで服用させることが初期治療において重要である。

麻黄湯を服用して、軽い発汗があれば、処方が有効であったと考える。時に尿量が増加して解熱したり、まれに鼻出血をきたして治癒する場合もある。発汗過多になるとかえって状態を悪化させる可能性がある。解熱後の服用は原則として避ける。

藤平は、自身の感冒に麻黄湯を服用し、その後 2 時間ばかりの間に起こった身体の変化を詳細に記録しており²⁾、この記述は本方を使用する上で大変参考になる。

インフルエンザに対しては、これまで多く使用されている。この疾患は、近年オセルタミビルの出現により、治療方法に劇的な変革がなされた。しかし、迅速診断キットでインフルエンザと診断して麻黄湯を投与して軽快せしめた症例報告もあり、本方のこの疾患への応用は、もっと行われてもよいと考えられる。これに関するいくつかの臨床研究がある。

阿部は、インフルエンザを含む急性上気道炎の際に麻黄湯を含めた漢方薬を用いることにより、抗生素質の併用を要するような悪化した症例は明らかに減少したと述べている³⁾。

窟らは、38℃ 以上の発熱を含むインフルエンザ様症状

を呈した5ヵ月から13歳までの49症例（男：女=24:25）を、オセルタミビル投与群18例、麻黄湯・オセルタミビル併用群14例、麻黄湯投与群17例に分けて効果を検討した結果、3群間における治療開始から解熱までの時間は、オセルタミビル投与群では平均31.9時間、麻黄湯・オセルタミビル併用群では平均21.9時間、麻黄湯単独群では17.7時間であったと報告している⁴⁾。

黒木は、2003年から2005年までの3シーズンにわたって、インフルエンザに対するオセルタミビルと麻黄湯の併用効果の検討を行い、窪と似た結果を得ている。ただ併用群は、解熱に要する時間ではなく、臨床症状の改善に優れると報告している⁵⁾。

福富らは、2003年冬～2004年春に、迅速診断キットでインフルエンザと診断した症例24例を2群に分けて上記と同様の治療を行った結果、オセルタミビル・麻黄湯併用群はオセルタミビル単独群に比して、頭痛の持続日数と全身倦怠の持続日数が短い（有意差あり）と報告している⁶⁾。

木元らは、2004年1月から3月に、迅速診断キットでインフルエンザと診断した症例に対し、オセルタミビル投与下で、麻黄湯併用と通常の西洋薬併用との臨床経過の比較を行い、麻黄湯併用群は西洋薬併用群に比して、約12時間早く解熱し、疲労感、めまいふらつき感、食欲不振が早く改善する傾向があると述べている。また、西洋薬併用群では3例にCRPの上昇が認められたが、麻黄湯併用群にはそれは見られなかったという⁷⁾。

また、窪らは、発症24時間以内に麻黄湯を内服した場合に、鼻腔ぬぐい液中のインフルエンザウィルス量の減少が認められると報告している⁸⁾。

■ 鼻炎

麻黄湯は鼻汁、鼻閉などの鼻炎の症状を改善する。乳幼児で、鼻閉のため授乳に難渋する場合に、麻黄湯を口腔粘膜などに塗ってミルクなどと一緒に内服させると呼吸が楽になり、授乳量が増加することがある。勿論、感冒で鼻汁が出る場合にも用いられる。

成人の副鼻腔炎にも奏効することがある。市村らは、点鼻薬の連用による肥厚性鼻炎に対して麻黄湯を投与し、8例全例が1ヵ月程度で症状が軽快し、鼻腔容積が増加したという⁹⁾。また鈴木は、難治性慢性副鼻腔炎に麻黄湯と抗生素質のセフジニルを併用することで、効果のみられた5症例を報告している¹⁰⁾。

＜引用文献＞

- 1) pHの変化 食事（制酸薬）と麻黄湯 相互作用のメカニズムの分類（5） 薬局別冊 55: 115, 2004.
- 2) 藤平健 出来たての麻黄湯証を観る 漢方の臨床 18: 150, 1971.
- 3) 阿部勝利 小児上気道炎の漢方薬・西洋薬両群における治療成績について 第10回日本小児東洋医学研究会講演録 10: 19, 1993.
- 4) 窪智宏ほか 小児インフルエンザ感染症に対する麻黄湯の効果 第56回日本東洋医学会学術総会抄録集 p204, 2005.
- 5) 黒木春郎 インフルエンザに対する麻黄湯の使用経験 第6回日本小児漢方懇話会 2005.
- 6) 福富悌ほか インフルエンザの症状軽減に有効であった麻黄湯の使用経験 漢方医学 29: 228, 2005.
- 7) 木元博史ほか インフルエンザに対するリン酸オセルタミビルと麻黄湯の併用効果 漢方医学 29: 166, 2005.

■ 咳、喘息

喘息や咳嗽の治療に用いられることがある。それほど激しい咳ではなく、特に胸肋部が張って苦しいという場合にも有効である。通常の咳嗽のみならず、小児などで風邪をひいた訳でもないのにぜいぜいと呼吸が苦しそうな喘鳴のような状態にも、効果をみることがある。

大塚は、「感冒の初期などで、表証があつて咳嗽のあるものに用いる。一般に表証に伴う咳は軽く、多くは乾咳で時に喘鳴を伴うことがある。この様な場合には麻黄湯を用いて發汗して表邪を消散せしめると、咳もまた自然に治癒するものである。乳幼児が風邪をひいたり、気管支炎を起こしたりして、咳が出る時には麻黄を主薬とする処方が効くことが多い。ことにその咳がぜいぜいという喘鳴を伴っているような時はまことによく効く。服薬を始めたその夜から咳がやんで喜ばれることが多い。寒気がしたり、熱が出たりするような場合には麻黄湯を用いることが多い。」と述べている¹¹⁾。

■ 夜尿症

1950年代に、吉村が報告したことにより、広く行われるようになった用い方である。夜尿症のある児童が感冒に罹患した際に葛根湯を用いて夜尿症が止まったことを契機にし、同じく麻黄を含む麻黄湯でもよく効くことがわかったため、応用されるようになった。5歳以下の奏効率は100%近いと述べている。特に、寝ぼけいくら起こしても起きないような子供に有効であるという¹²⁾。

■ その他

慢性肝炎の治療に使用するインターフェロンの副作用である発熱に対する応用例がある。急激な発熱をインフルエンザの急性期の病状に見立てたのである。貝沼らは、8名の慢性C型肝炎の患者において、麻黄湯6名、大青竜湯2名をインターフェロン投与直前と投与後の計2～3回内服し、関節痛、全身倦怠感、発熱などの症状について、漢方薬の併用なしの場合と比較した。その結果、関節痛と体熱感では有意差はみられなかったが、頭痛、発熱、全身倦怠感は漢方併用群で症状出現が少ない傾向がみられ、食欲低下や口渴、気分不快は明らかに漢方併用群で低下したという。また、14日目には関節痛を訴えるものが漢方薬未使用群では半数にみられたが、漢方薬を併用した群では皆無であったと述べている¹³⁾。

その他、直腸癌の術後射精障害に奏効した例¹⁴⁾や眼部帯状疱疹に用いた報告¹⁵⁾などがある。

- 8) 窪智宏ほか インフルエンザ感染症に対する麻黄湯の効果－成人例での検討－漢方と免疫・アレルギー 20: 54, 2006.
- 9) 市村恵一ほか 点鼻薬性鼻炎の離脱における麻黄湯の有用性 Prog. Med. 15: 1482, 1995.
- 10) 鈴木義一 難治性慢性副鼻腔炎に対する麻黄湯、セフジニルの併用投与療法 Prog. Med. 24: 833, 2004.
- 11) 大塚敬節 症候による漢方治療の実際 p237, 南山堂 東京 1993.
- 12) 細野史郎ほか 婦人科疾患を語る 漢方の臨床 4: 212, 1957.
- 13) 貝沼茂三郎ほか C型慢性肝炎に対するインターフェロン治療と漢方治療併用による副作用軽減の効果 漢方と最新治療 7: 339, 1999.
- 14) 柏木一男 直腸癌術後の射精障害に麻黄湯が奏効した一例 漢方診療 17: 108, 1998.
- 15) 小倉重成 眼部帯状疱疹治療 日東医誌 11: 152, 1961.